麢羊

のあり、さればその百餘のうちにて角あるものは、僅に三四頭に過ぎず、その角に圓なるも扁なるもあり、また吳羊と同じく後へ向ふもあれば、よこにわかれて牛角の如きもあり、一種眼邊及び四脚共に黑色のものあり、これは百三四十頭のうちにて、たゞ一頭なれば奇品なり、今此毛をかりて、羅紗絨(ラシャ)を製するに、舶來のものに異ならず、その毛を採には、四足を木材に結付て刈といへり、扱觀文獸譜に、これを餌するに、豆葉を以てする事、馬の如しとおれども、今は大麥を煮熟して食せしむるは、正に餌畜の法を得たるものなるべし、又海外には種々の綿羊ありといへ共、清舶の皇國に載來りしは、たゞ此一種也、

〔桃源遺事五〕一西山公(〇徳川光圀)むかしより禽獸草木の類ひまでも、〇中略この國(〇常陸)へ御うつしなされ候、〇中略獸の類〇中略羊(年々子を生餘多に相成申候)綿羊(右同斷)

〔新撰字鏡犭〕狹(侯夾反、加万志之、古作陜、)

〔本草和名十五獸禽〕零羊角(仁諝音義、正作䍅、)山羊一名羱羊、(仁諝音元、已上二名出陶景注、)䍅一名大羊、一名羱羊、一名野羊、又有山驢、和名加末之々乃都乃、

〔倭名類聚抄十八毛群名〕麢羊　爾雅注云、麢羊(力丁反、或作䍅、和名加萬之々、)大於羊而大角者也、

〔箋注倭名類聚抄七獸名〕廣韻、麢䍅上同、〇中略釋獸麢大羊、郭注云、麢羊似羊而大、角員鋭、好在山崕間、字句少異、此所引蓋舊注、但大角恐有誤、說文、麢大羊而細角、西山經、翠山其陰多旄牛麢麝、注、麢好在山崖間、上林賦注張揖曰、壄羊、麢羊也、似羊而青、廣雅作冷角、本草作零羊、陶注、多兩角者、一角者爲勝、角甚多節、蹙々員繞、本草拾遺云、羚羊角有神、夜宿以角掛樹、不著地、但取角彎中深鋭緊小猶有掛痕者、即是眞、唐本注、如牛大、其角堪爲鞍橋、今用細如人指長四寸蹙文細者、〇中略伊勢本有内藏式云麢羊角零羊九字、蓋後人所加、